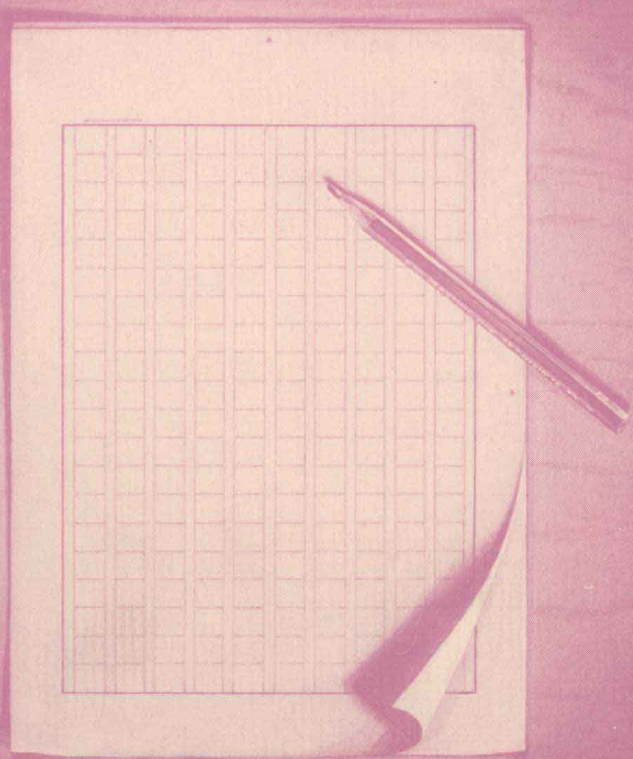


戦争を知らない世代へII ①⑥奈良編

飢えと怯えに耐えた日々

戦時下の疎開地・奈良の記録

創価学会青年部反戦出版委員会



第三文明社

戦争を知らない世代へⅡ ⑯ 奈良編

飢えと怯えに耐えた日々——戦時下の疎開地・奈良の記録

昭和59年8月15日

初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5-117823 電話03(294)8731(代)

印刷 山崎印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します

1984 Printed in Japan

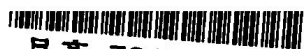
ISBN4-476-07216-X

C0036

60. 6. 1

95537

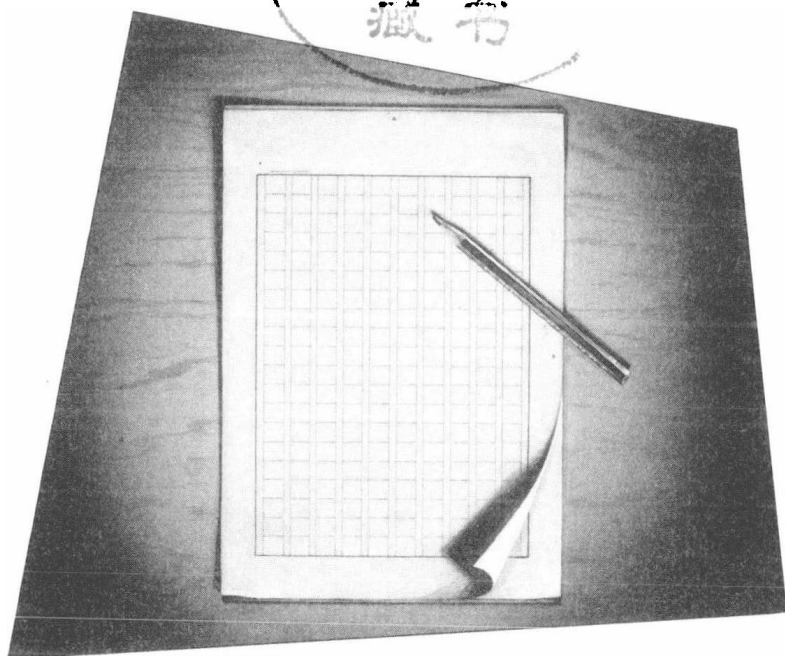
¥1200



日文 701515141

戦争を知らない世代へ Ⅱ⑬ 奈良編
飢えと怯えに耐えた日々
戦時下の疎開地・奈良の記録

創価学会青年部反戦出版委員会



第三文明社

発刊の辞

「戦争ほど残酷なものはない」

「戦争ほど悲惨なものはない」

まさに戦争とは人間と人間が殺し合う最も愚かな行為である。

戦争の残虐性、悲惨さは戦場のみではない。いやそれ以上に、尊い働き手であり一家の柱ともいふべき夫や子を戦地に送り出したあとに残された人々の苦しみ、不安、焦躁、悲惨さはいかばかりであったか。

それはまさに抵抗すらできぬ老人や婦女子の慟哭の日々であったに違いない。

さて、私達の住む奈良県は古代より万葉の地とうたわれ、日本の歴史が眠るロマンあふれる国土である。そのためであろうか、戦時中も大きな空襲被災を受けなかったし広島や長崎に比べると、反戦の気運が薄いといわれてきたが果してそうであろうか。反戦の意識がなかったのではなく、反戦の意識が掘り起こされてなかっただけであると私は思う。

この点に焦点をあてて、庶民の側からの反戦の叫びを一冊の本にまとめたのが本書である。テーマも「飢えと怯えに耐えた日々」と決めた次第である。

本書のなかで語ってくれた方々の実体験の一言一言、そして、夫を子を親をとられ失った悲しみ苦しみの戦争体験の凄まじさは、戦争を知らない私達に強烈な反省を与えるにあまりあるものであった。

冒頭に掲げた戦争の魔性を、銃後の人々に力点をおき四十三本の疎開記録を収録したが、それはスローガン化した反戦の言葉ではない。風化した反戦理論でもない。イデオロギーでもない。正義の戦争も、聖なる戦争もない。そして戦争の最大の犠牲者は、民衆であることは、いずこの国も等しく同じであるということが痛切に訴えられている。

民衆の大地に根差した平和運動こそ、二十一世紀に生きる私達青年の最大の責務である。生命を尊厳とするのが仏法である。生命尊厳こそ、われわれ創価学会青年部の平和運動の原点である。戦無派といわれる戦後第二世代の手によって、ここに奈良県青年部の初の反戦出版が発刊できたことは「戦争を知らない世代へ」着実に根がおろされ、更に大きなうねりとなっていくであろうことを確信する。

私達の愛する郷土・奈良県は、仏法発祥の地であり、生命尊厳の原点の地としての使命を果すべく、願くは本書が平和構築の礎となれば望外の喜びである。

最後にこの発刊作業にあたってご協力いただいた方々に感謝の意を表すと共に、編集にあたっ

た反戦出版委員会のメンバーにその労を心より謝すものである。

昭和五十九年八月十五日

創価学会青年部
奈良県青年部長

川本 慶博

目次 発刊の辞

第一章 心の戦争

落涙果てしなき桎梏の日々……………	辻本レイ	10
魔性が彩る純白の心……………	田端節子	16
裏山にぶつけたくやしき……………	四夷淑子	22
子供の笑顔に救われて……………	田鍋小富士	30
沈丁花と二つの死……………	岩本芳子	36
残酷な仕打ち……………	匿名	42
ねたみと優しさの果てに……………	永井アサノ	48
いも弁当と下市弁……………	入江和子	53
笑顔に隠れたおばの涙……………	北 敏子	58
ひと筋の祖母の涙……………	清水教子	63
裏切られた誠意……………	上田悦子	68
忘れられないいまわしい過去……………	勝眞梅子	72
奪われた愛と幸福……………	枡岡勝子	77

第二章 生活戦争

行商帰りのこわい道	竹村千代	82
夫の戦死と邪魔者	長部谷千代子	89
黒い？ 若草山	菊澤孝子	94
我が子の顔を一目でも	石井好枝	100
老婆と子供	中根春子	105
新妻の愛と藤の花	北乾房子	110
夫から届いた一通の手紙	山中ツル	115
新婚共同生活	泉井ヤスノ	119
我が家でもミニ戦争勃発	森川輝子	123
冷たい他人の目の中で	笹木清悦	127
子供らしさを失って	浜岡日出子	131
母子をつなぐ絆	町田若子	136
畳一枚に雑魚寝の生活	宮内豊司	141
待ちどおしかった雨の日	勝村美奈子	145
我が子に平和の願いを込めて	中川ヒサエ	149

第三章 食糧戦争

疎開も戦争だった.....	山田芳枝	154
一粒のお米に愛と憎しみが.....	村井キクエ	160
少年が見た戦争.....	岡埜和弘	166
死と隣り合わせの通勤.....	中井うた子	173
夫は必ず帰ってくる.....	植西クニエ	177
消えた嫁入り道具.....	鷹野秀子	182
吉野桜に散る涙.....	高城ユキ子	186
『滝井』の一個連隊.....	上本綾子	191
瞳が映した虚像の生活.....	和田幹男	194
人の心と白い米.....	中平美代子	199
戦いは疎開生活にあった.....	高島貞子	205
奈良も安住の地ではなかった.....	坂井京子	210
兄弟と銭湯.....	匿名	214
祖母の涙に映る戦争への憎しみ.....	島田三恵子	218
お父ちゃんが帰ってきた.....	杉本千鶴子	222

あとがき

資料（年表・図表）

第一章 心の戦争

落涙果てしなき極枯の日々

辻本レイ(76歳)



親子五人で、兄の家へ疎開。兄の家では、子供が七人。夫は兄に氣を使ひすぎたことなどが因となり神経衰弱。そして入院し死亡。また、子供が急病にもかかわらず、医師にも診てもらえない時も。さらには、兄の怒りを買ひ、子供ともども出て行くはめに。まるで地獄のような生活が、続いたのであった。

ちょうど昭和十九年三月中旬のこと、その当時私達親子は、大阪市住吉区帝塚山に住んでおりました。子供が九歳の長女を頭に、五歳の長男、二歳の次男がおりました。中でも長女は国民学校初等科二年生で、胸をわずらっており、大変弱々しい子供でした。

戦争は日を増すごとに激しくなるばかりです。私の住んでいる所も危険地区になってきたので、田舎の方に親類縁故のある家庭は、疎開するようにと学校から通知がありました。そのため私達親子五人も、私の兄の家がある奈良県・王寺町へと疎開させてもらったのです。

兄の家は子供が七人おり、みんな育ちざかりの子供達ばかり、にもかかわらず私達が疎開する

ことによって、さらに生活が大変になっているのは目に見えているだけに氣を使い、小さく帰りました。兄は鉄道員で三反ほどの農業をしていました。農業といっても小作農業で細々と作物を作っており、満足なものはあまり作れませんでした。それだけに食物は裕福ではなく、母親には大変心配をかけました。でも母がいてくれたので私達も生きることができました。

ここで、一つ難儀なことがありました。疎開をさせてもらっている以上、家賃を払おうと思い、着物を売ったりしてお金を工面しました。売っても二東三文でしたが、精いっぱい努力しました。しかし、兄は受け取ってくれません。主人は「申しわけない」と氣を使い、ついには食べ物などを通らず、夜もあまり眠れなくなったのです。とうとう神経衰弱にかかり、近くの病院に入院してしまいました。

兄の家へ疎開してちょうど数ヵ月目のことでした。さあ、私達親子は大変困りました。主人の看病の行き帰りに通る池の所で幾度立ちどまったか知れません。「これからどうして暮らしていけばいいのか」「このまま子供と一緒にこの池の中に飛び込んだ方が楽になるかも知れない」——こう思ったからです。しかし、幼い三人の子供の笑顔が水面に浮かぶのを見て、「こんなことをしてはいけない。死ぬことを考えればどんな苦勞もできる。氣を確かに持たなければ……」と思ひなおし、家に帰ったものでした。

くる日もくる日も戦争と生活との板ばさみにあった地獄でした。

ついにきたるべき時がきたのです。昭和二十年一月八日のことでした。病院で主人が死亡した

のです。私達親子は、ただ兄に頭を下げるばかりでした。疎開させていただいているにもかかわらず、大変な迷惑までかけてしまったからです。そして葬式も形ばかりの葬式ですませました。皆の前では主人を亡くし悲しんでいる時ではない、との気持ちから涙一つ見せませんでした。が、内心は、これほど悲しくつらいことはありませんでした。『これから親子四人どうして生きていくか』と思うと気が遠くなるばかりでした。戦争さえなかったらこんな苦しみを味あわなくてすむのに、と、戦争をこの時ほどうらんだことはありません。そんな矢先に、近所の人のお世話で青年学校の事務員兼雑務として奉仕することになりました。

その学校では、十七歳から二十歳までの若い人が、戦争に勝つために訓練を受けていました。兵隊さんが教えていたのです。特に手を抜いた動作をすれば、厳しい言葉が響きわたっていました。私の仕事といっても、兵隊さんにお茶を出したり、雑務ばかりでした。仕事もすこし慣れたころ、また大変なことが容赦なく襲ってきたのです。

次男が風邪をこじらせ、熱が下がりません。医者に見せるにも生活が苦しく、見てもらうこともできず、一日一日、体が細くなるばかりでした。痛々しい姿を見るにつけて、どうしようかと思うばかりです。周囲からは、このような世の中なので一日も早く死んでしまえばよいのに、と言われるたびに、次男は小さな子供ながらも声もたてずに涙を浮かべていました。その涙を見るたびに、親の身にとって胸が裂かれる思いでした。『このようななじめることがあってよいのか、ただ一度でいいから医者に見てもらいたい。そしてなおしてやりたい』と、どれほど祈ったか知

れません。

幸いにも、近くに女医さんがこられた際、「かわいいそうに。見て上げましょう」と、家まできて、見ていただくことができました。

この時のうれしさに思わず熱い涙がほほを伝いました。一本の注射で全快することができたことは一生忘れられません。

その後、一週間ほどして母親が私に、「かわいいそうだから」ということで、「これをおかゆにして食べさせてやり」と、お米を二合ほどくれました。このことが兄に知れ、とうとう家を出て行くはめになってしまいました。ちょうど二月の雪の降る寒い時です。長女が十歳、長男が六歳、次男が三歳、雪の降る中を風呂敷包み一つ下げて、とぼとぼと出て行く時の寒さは忘れられません。子供達にとっても身にしみるのか、長女が「お母さん、戦争さえなかったら大阪で住んでいられたのにね」と話すひとは、私にとって返す言葉もなく、また次男が私の肩から、「お母ちゃん、僕らに羽があったらよかったのに。あのカラスのように松の木にとまって眠ることができるとね」との言葉に涙する思いでした。長男も「お母さん、おっちゃんに僕らに出て行けと言われても今晚どこで寝るの」と問われた時は、熱い熱い涙がひと筋ふた筋と今にも流れ落ちそうです。ここで涙を流すと、子供がみんな泣きます。出てくる涙をぐっとこらえて、「お母さんが働いているのだから泣いたら弱虫になる」と言って、子供達を勇気づけました。

こんな姿を見た村の人が、ありがたくも手をまねいて「私の家でよかったら泊まりなさい」と

言って、三晩泊めてくれました。あまりのうれしさに手を合いました。

そして、村の方々のお世話で、六畳一間を借りることができました。納屋を作り替えたもので、子供達も部屋の中ではしゃぎまわっていました。安住の地を見つけた喜びでほっとした様子で、その夜の寝顔は、何か楽しい夢を見ているかのように、むじゃきな顔でした。こんな子供までまき込んで、戦争なんか早く終わってしまえばよいのに、どうして平和な世の中が早くこないのかと、憎くて憎くてしょうがありませんでした。そして親子四人水入らずの生活が始まったところ、私が勤めていた青年学校も北葛城郡下田の方へ移され、私も通勤することができなくなり困ってしまいました。

そんな折り、「国有鉄道の貨物係として奉職しませんか」と言ってくださる方があり、幸い湊町通信区が戦争のために王寺の方へ疎開しておりましたので、通勤も近くて、さっそく勤めることができました。子供のために働かなければと張りきって通いました。

それから五ヵ月ほど過ぎた昭和二十年八月のことです。いつものように同僚の方二人とともに道を急ぎ足で勤務先の方へ歩いていたら、通りすがりの人が、「あなた達、あの空を見なさい。艦載機が三機飛んでおりますよ。気をつけて行きなさい」と言って注意してくれました。橋のたもとで同僚の方と別れて、私一人川岸を数分ほど行った時、一機の艦載機が急降下してきました。私は急いで岸辺に植えてあるあぜ豆の中にすべり込みました。そうしたら、王寺駅に停まっていた機関車をめがけて、突然砲射を激しく始めました。

私の隠れている頭の上を通っていくのです。私の上を通ること数十回、あぜ豆の中にいる私は生きた心地はしません。もう、射たれるのかと思うと、手を合わせて、どうか弾が飛んできませんように、と祈っていました。

数十回の回転がどれだけ長く恐ろしかったかわかりません。ようやく音が遠のき、ああ私は助かった”と思って、立ち上がろうとしても腰が抜けたようになり、立つことができません。やっこの思いで手と足で恐る恐るはい上がって見ると、駅の方では近くの民家から火柱が立ち上がっているではありませんか。あちらからもこちらからも煙がモクモクと立ち上がっております。今思い出しても身震いがいたします。

戦争は地獄です。人の命はもちろん、家も畑もすべてをダメにしています。それ以上に人間の心をズタズタにしています。こんなむごたらしい戦争は二度と繰り返してほしくありません。私も老人とはいえ、子供達にも生ある限り、どこまでも平和を叫び続けていきます。